高松教区司教教書

聖体の年にちなんで
ーともに捧げるミサー

昨年は「聖体の年」と決められ、全世界で聖体への理解と熱心さを深める企画が多くなされました。高松教区においては、種々の理由で「聖体の年」と銘打って実施することができませんでしたので、一年遅れですが、今年度を「聖体の年」とすることに決定しました。

聖体を理解するには、どうしても感謝の祭儀（ミサ）の理解が前提となります。感謝の祭儀の説明をしながら、聖体とは何かを理解し、更に聖体によって活かされる信仰生活について述べるつもりです。信仰生活については、「主の日の重要性」を述べる必要がありますので、今年度後半に別の教書を準備しております。

ミサは大きく分けて、三部より成り立っています。第一部は「みことばの典礼」、第二部は「感謝の典礼」、第三部は「交わりの儀」です。これら全部を含めて言えること、それは「ともに捧げるミサ」という表現が大切だということです。ミサはあずかるもの、司祭が行うものという固定観念にとらわれているのでしたら、この際「ともに捧げる」という考え方に切り替えて頂きたい。「ともに捧げる」とは、ミサの三つのいずれの部分にも積極的に参加することをさしています。それでは、どうすればミサに積極的に参加し、ともに捧げるミサを体験することができるのでしょうか。

三部全部をこの教書に盛り込むのは不可能ですの

で、第二部「感謝の典礼」に内容を限定して述べることとします。だからと言って、残る二つがそれ程重要でないという意味ではありません。後日何かの機会にこの二つの部についても述べる機会をつくりたいと思っています。

1　聖霊が祭壇の上に降り、会堂を恵みで満たす

パンとぶどう酒が祭壇に運ばれ、神の救いの業を述べる祈りが唱えられ、「感謝の賛歌」が歌われます。それから、ミサの中心部、感謝の典礼に入ります。私は、ミサの第二奉献文にそってこの部分を説明することとします。

まず司祭は按手して次のように祈ります。「いま聖霊によって、この供えものをとうといものにしてください」。この按手と祈りは、ギリシャ語で「エピクレシス」といわれていて、聖霊の働きを求める祈りとなっています。会衆は聖霊を祈り求め、司祭が按手することで聖霊が祭壇を覆います。それから、「わたしたちのために、主イエス・キリストのおんからだとおん血になりますように」と続きます。　聖霊が降る事で、わたしたちを義人にしてくださいとか、信仰を強めてくださいとかを祈っているのではありません。聖霊が祭壇を恵み一杯で満たし、それによってここにあるパンとぶどう酒がキリストのおんからだとおん血になるように祈るのです。

この場面は二つのことを考えさせてくれます。ミサの中で聖霊が今ここに降っていること。そして司祭のことばを通して、聖霊がパンとぶどう酒をキリストのおんからだとおん血に変えて下さるとこと。わたしたちは本当にこれを信じているのでしょうか。

この瞬間パンとぶどう酒はキリストのおんからだとおん血に変わるのです。この場面を、まるで観劇するかのように儀式を眺めているだけではなかったでしょうか。聖変化の後に「信仰の神秘」と歌われます。そうです、ミサは神秘なのです。信仰をもってミサにあずからない限り、ミサを理解し、その恵みにあずかることは決してありません。この一連の動作を見て、何てばかばかしいと思うか、何てすばらしいと思うか、それは信仰の岐路です。「これはキリストのおんからだ、キリストです。信じますか」と、わたしたちに問いかけているのです。

2　ミサはいけにえである

ぶどう酒が聖変化された後に、「これをわたしの記念として行いなさい」ということばでしめくくります。記念することをギリシャ語で「アナムネシス」といいますが、さて何を記念するのでしょうか。「わたしを」と言っていますから、イエスのことを思い浮かべれば良いと考える人もいます。最後の晩餐があったことを思い出せばよいと考える人もいます。パンの聖別のことばは次のように始まります。「主イエスはすすんで受難に向かう前に、パンを取り、感謝をささげ、割って弟子に与えて仰せになりました」。日本司教団が現在ローマに申請している「日本における奉献文の改定」では、「割る」ということばを原文通り「裂く」ということばに戻しました。「裂く」という単語はいかにも生々しくて抵抗があるという人がいますが、このことばには大きな意味があります。「裂く」という語に、いけにえとして死んで自分を渡すという意味を持たせています。パンとぶどう酒は、全く自分を死に渡して、人々に捧げつくすキリストの姿

を示しているのです。

これを考えると次のことばを理解することができます。「これはあなたがたのために渡される　わたしのからだである」。人々のために渡され、引き裂かれるキリストのことを思い起こすのがミサなのです。ぶどう酒の聖別のところでは、「これは　わたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて　罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血」と続きます。人々のために流されるキリストの血によって人類に罪のゆるしと新しいいのちが始まるのです。わたしたちが記念し、思い起こすのは、単に昔の出来事ではなく、今この祭壇でわたしたちのために死に渡され、ご自分を全く無にして父である神に自分を捧げていることを思い起こすのです。ミサとは、わたしたちの主イエス・キリストがいけにえとして捧げられたということを表しています。

父である神は、ご自分が誰よりも愛するキリストが十字架の上から人々のためにいのちをかけて願う祈りを聞いてくださいます。「多くの人のために」という表現が使われていますが、これは「全ての人のために」という意味です。戦争で苦しんでいる人たちのために、虐待されている児童のために、暴力に苦しむ女性たちのために、自分の老いをみつめながら死を迎えようとしている人たちのために、神は彼らに必要な恵みを下さるのです。それもこれもキリストが自分の死をかけて人々のために懇願し続けているからです。

「記念せよ」の中にはもう一つの意味があります。イエス・キリストのおんからだとおん血が祭壇に捧げられるのに合わせて、わたしたちもいけにえとして捧げられます。わたしたちは小さくて貧しいかも

しれません。それでも父なる神はそれをご覧になり、わたしたちの願いを聞いてくださいます。わたしたちはその実、とるに足りない、欠点の多い、むしろ罪深い人間なのです。それでもキリストとともに自分を捧げることで、わたしたちの願いは聞きいれられるのです。「わたしたちはいま、主イエスの死と復活の記念を行い、ここで　あなたに奉仕できることを感謝し、いのちのパンと救いの杯をささげます」と聖変化の後に唱えることになります。そして、その時復活されたキリストの栄光にわたしたちも包まれるのです。

ここまで考えますと、ミサに漠然とあずかってはいけないと言えます。聖堂に入る前に確かな意向をもって来ることです。自分の家族のためにか、世界に苦しむ人のためにか、人生の意味を失った人のためにか、ともかくはっきりした意向をもって教会を訪れ、ミサにあずかり、キリストとともに自分の願いを捧げることです。感謝を表すためにミサに参加するのも良いでしょう。このようにして、世界に神の恵みが充満することになります。わたしたちの住んでいる町には、ほんの一握りの信者しかいません。それを嘆くより、その少ない信者が捧げるミサの方が大事なのです。このミサの中において自分を捧げることで、神が人の想いを変えてくださり、新しいいのちへと向けていってくださいます。宣教の実りは神にあります。わたしたちは人々のために取り次ぎ、祈りを捧げる役割を持っているに過ぎません。わたしたちが宣教しているのではなく、神がしてくださっているのです。わたしたちは単なる道具に過ぎないのです。

わたしは年をとったので、はや教会活動ができないと嘆く方々がいます。本当でしょうか。病気や老

齢を抱えて、それをキリストのいけにえに合わせて捧げるときに、すばらしい恵みが世界に下されます。これによりイラクに平和がもたらされるでしょう。自分の進路に迷っている青年に新しい生き方が与えられるでしょう。遠いアフリカの地で新しい子供が誕生するでしょう。わたしたちがキリストとともに捧げるミサは世界の人々にとって最大の恵みなのです。従って「捧げます」と奉献文の中で司祭が祈りを唱える時に、捧げますという意向を、わたしたちもしっかりと表明しなければなりません。

以上から言えることが一つあります。ミサは全世界のために捧げられるものであり、普遍的性格をもっているということです。聖なる気分に浸れるとか、ありがたいという感情になるというだけではありません。仲間内の友情を固めるとか、カテケージスの手段ということでもありません。真剣にキリストとともに自分を捧げる行為であるということを忘れてはなりません。

3　カトリック教会にとって司祭はどうしても必要である

秘跡による司祭職についても一言述べる必要があります。それは、これがカトリック教会のカトリック教会たる所以でもあるからです。司祭ということで、信徒の祭司職と秘跡による祭司職の二つに分かれています。信徒は洗礼を受けたその時から司祭の役割を果たしています。ことばを伝えたり、典礼に参加して聖歌や祭壇奉仕にかかわったり、朗読奉仕をします。必要に応じて聖体奉仕者になったり、集会祭儀の司式者になります。また洗礼を授けたり、結婚式に立ち会ったり、通夜の祈りを主宰したりす

ることもあります。しかし、秘跡の執行は司祭に一切限られています。

多くのことは信徒に任せられています。教会運営の大半は信徒の手にあり、教会の活性化の多くは信徒にかかっています。高松教区において急務なのは信徒の養成です。信徒の祭司職が定着し、高められている教会では、典礼の行使においても、宣教についても非常に積極的です。熱心な教会共同体からは確かな司祭召命が生まれてきます。自分たちの共同体から生まれてくる司祭召命が自然であり、教会のあるべき姿を考えさせてくれます。司祭召命が生まれてこない共同体は、自分たちの教会の体質を見直す作業が必要です。即ち司祭が居なくなれば、他所から連れてくるという体質をいつまでも続けている限り、教区の独立は望めないということにもなります。

司祭の祭司職は「秘跡」を何よりも大事にするということにつきます。ここに多くのプロテスタント教会と根本的に異なるカトリック教会の独自性があります。ミサをどのように捧げるか、どのように赦しの秘跡を行うかは、司祭の大きな課題です。信徒は、司祭を教会管理者、または雑役を果す便利屋にしてしまってはいけないのです。司祭はミサに全部をかけることが第一です。司祭が按手するときに聖霊が降るということを考えるだけでも、司祭が果す役割は何であるかをはっきりと読み取ることができます。キリストのことばを伝え、キリストの心とからだを与え続ける人が司祭なのです。それだけに、ミサをどのようにすれば、品位ある、そして会衆とともに捧げることができるかを、まず自分に問いかけないといけません。この意味で大勢の司祭が必要とも言えません。少ない数であっても、秘跡を大切にし、

典礼儀式を何よりも尊び、人々を深い霊性へと招く司祭が望まれます。

最後に

「キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに、聖霊の交わりの中で、全能の神、父であるあなたに、すべての誉れと栄光は、世々に至るまで、アーメン」と力強く歌って、第二部を締めくくりましょう。小教区のミサはそこに属する全ての人が捧げるミサです。これは他のどんな典礼にも勝っています。日曜日のミサの中で、キリストとともに三位の神に賛美を捧げ、教会の一致を歌いあげているのが、この「栄唱」なのです。

聖体拝領についても一言申しましょう。司祭は聖体を掲げて「キリストのおんからだ」と告げます。「アーメン」と答えるのは、単なる儀式上のことばではありません。そこには、「これがキリストのからだである」と信仰告白をしているわたしがいるのです。しっかりした声で「アーメン」と答えるようにしましょう。聖体を頂くことで、わたしたちは主キリストと一つになり、聖体を頂く信仰の仲間とともに一つの教会をつくるのです。

同様に聖体を拝領するとは、習慣的に行うのではなく、しっかりとした信念をもって行うことです。キリストは人々のためにいのちを捨てるほどの愛をもった。同様にわたしたちも聖体を頂くとき、他人のために生きる、人を愛して生きることを誓うのです。

聖体はミサが終わって後も祭壇に残されます。いつでも聖堂を訪れれば、そこに主がいます。ひんぱんに聖体訪問する習慣は現代廃れていますが、教会

を訪れる時には、聖堂に安置されている主にほんの数分でもあいさつする習慣を絶やさないようにしたいものです。同様に聖体行列などの信心業も可能な限り小教区において実施することをお勧めします。

「聖体の年」を送るにあたり、ミサとは何か、聖体とは何かを少し説明しました。説明できない箇所がたくさん残っています。この一年間をかけて自分たちの小教区、または教区の行事の中で深めていってくださることを心よりお願いします。また小教区において何らかの形でこの教書を深める集まりが開かれることを希望します。

二〇〇六年六月一八日

聖体の祝日

高松教区司教

溝部　脩